児童期における生活環境の変化
―携帯電話が与える影響とは―

城　考洋

はじめに

第1節　テーマの選択理由

現代社会において、子どもの周りは携帯電話・ゲーム機器・レジャー施設等と便利になり、子どもの遊び方が多様化している。しかし、その中でその多様化した環境は子どもに対して良いものだけを果たして与えているのであろうか。成長期である子どもに何か悪い影響も与えているのではないか。そのため、子どもの昭和時代と平成時代の生活環境を比較し、現代社会の環境に接することでどのような影響を与えていくかを研究目的としていく。では、これからテーマの背景として子どもの発達心理に環境が影響を与えられていることを文献で述べる。

第2節　テーマの背景・構築

文献の「児童心理学の発達2010」から、人間の発達の仕組みである発達心理学の学問の中では1960年代～1970年代まで人間が発達していくにあたって文化的文脈についての影響の議論は事実上なかったが、1970年代以降から人間の発達と文化は関係しているのではないかという前提が急速に広まった。国際児童年の1979年にはAmerican Psy-chologist(vol.34)で「心理学と子ども―最近の研究と実践」と題した特集のテーマとして「子どもの行動を文脈の中で研究することの必要性」「心理学という学問自体が社会的・文化的・歴史的文脈的に埋め込まれていること」「生涯にわたる発達変化を見ることの重要性」「研究の知見とその応用の相互作用」の4点が掲げられた。その研究動向から日本科学者も影響を受け、「日本人のしつけと教育」（東　1994）「文化の中のこども」（箕輪　1990）等の発達と文化を多面から視る文化発達学が確立されるようになった。

そのため、上記で述べた児童期の発達と文化的文脈についての影響は関係があり、子どもの時間に文化という環境因子が影響し成長していくということが把握できた。そして、

その後の個人個人の性格が文化・環境に左右されることが理解できる。

第3節　先行研究での仮説

先行研究では現代社会で重要なツールとなった携帯電話がコミュニケーションに影響を与えていると述べられている論文がいくつかあった。苅野正美、吉野絹子の「携帯電話コミュニケーションにおける新密度の影響」という論文では、若者は携帯電話の使用用途は電話でなく、メール機能が主であり、なにげない出来事を友達に報告し合うツールとし、携帯電話という媒体を通すことでお互いの親密性は深まると論じていた。また、大江宏子の『公共空間における非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」』という論文では日常で携帯所有者が何もすることがない状況の場合、ディスプレイを見ることで他人に何かしていると思わせ、その状況をうまく回避していると論じられていた。つまり、通信用途ではない使用方法もある。そのため、携帯電話というツールは人々に影響を与えていることが理解できた。そのため、私は携帯電話の使用方法が子どもたちのコミュニケーションに影響を与えていると仮説を立てる。ではこれから、第1章で本題での戦後と現代の生活環境はどのように変化していったのかを比較していき、第2章で影響を与えられた事柄を考察し、最後に予防策を論じていく。

第1章　戦後（昭和）と現代の子どもたちの休日の生活環境の違い

下記の2つの表は子どもがどのような生活環境で過ごしていたかを把握するための1973年と2009年の週末の小学生の過ごし事柄の統計表である。

1973年（表1－1）と2009年（表1－2）の小学生の週末の過ごし方の2つの統計表を比較してみると、まず項目の変化から生活環境が変化していることが把握できる。1973年（表1－1）の表には「近所で遊んだ」「校庭で遊んだ」「近所で自転車に乗った」「散歩した」という項目があり、1973年の子どもは外遊びの項目が多く、2009年（表1－2）の表には「ゲームをする」「パソコン・インターネットをする」という室内での遊びの項目が出来、1973年と2009年では子どもの生活環境は外で過ごしていた環境から室内で過ごしていく環境が整っていっているということが理解できた。

・表1−1　1973年　休日したこと　（%）

	サンプル数	テレビを見た	家で勉強	マンガを見た	本を読んだ	レコードを聞いた	ラジオを聞いた	家の手伝いをした	近所で遊んだ	校庭で遊んだ	塾へ行った	近所で自転車に乗った	散歩した	友達の家へ行った	買い物へ行った
全体	400人	95.0%	74.3	53.5	56.8	18.0	32.5	54.5	33.3	45.3	30.3	20.8	12.0	23.3	33.0
男子	200	96.0	71.0	58.5	53.5	20.0	42.0	40.5	41.0	49.5	29.5	28.0	10.0	26.0	24.5
女子	200	94.0	77.5	48.5	60.0	16.0	23.0	68.5	25.5	41.0	31.0	13.5	14.0	24.5	41.5

（資料所出）「子ども調査資料集成　子ども調査研究所（1973年6月）第1章子どの生活時間［Ⅱ−1−4］6月の日曜日にしたこと（小5）」

・表1−2　2009年　週末していたこと（%）

	サンプル数	テレビ・ビデオ・DVD等を見る	友人や仲間とあったり遊んだりする	ゲームをする	マンガを読む	スポーツや運動をする	音楽を聞く	家で勉強する	本を読む	パソコンやインターネットをする	家の手伝いをする	塾やお稽古へ行く
全体	1.105人	67.1%	63.2	51.9	43.2	42.8	18.4	34.4	29.7	20.1	19.1	16.7
男子	541	63.6	63.6	62.7	46.8	56.0	14.2	35.3	28.5	18.9	17.7	12.0
女子	564	70.6	62.8	41.5	39.7	30.1	22.3	33.5	30.9	21.3	20.4	21.1

（資料所出）「低年齢少年の生活と意識に関する調査　内閣府政策統括官（共生社会政策担当）（平成１９年２月）　第１章青少年を対象とする調査結果　第１節家庭・生活　８．過ごし方（小学生）」

次に2つの表で割合が高い項目を挙げ比較していくと、1973年の表(表1－1)と2009年(表1－2)の1位は「テレビを見る」という項目であった。割合は1973年(表1－1)では95%、2009年(表1－2) では67.1%でという高い割合であり、昔も今も子どもには欠かせないツールであるいうことが把握できた。

そして、1973年（表1－1）では2位「家で勉強」74.3%に対して、2009年（表1－2）では34.4%であったことから、1973年の小学生は勉強に対しての意識は高く、現代の小学生は勉強に対しての意識が薄れているということが把握できる。「塾やお稽古にいった」という項目でも30.3%と16.7%であり、外部のツールを活用して学習面を補う割合は低かった。外遊びの項目に関しては1973年（表1－1）では「近所で遊んだ」33.3%「校庭で遊んだ」45.3%「近所で自転車に乗った」20.8%であり、2009年（表1－2）では「スポーツや運動をする」42.8%とあったことから昔も現代も外で遊んでことが把握できた。しかし、現代ではスポーツというように遊び方が戦後の子どもと比較して多様化したと考えられた。

「家の手伝い」という項目に関しては、1973年（表1－1）54.5%に対して、2009年（表1－2）17.1%であり極端に減少していることが把握できた。手伝いをすることは親とコミュニケーションをとることが出来、自ら行動することにより自立心を成長させることができる大切な事柄である。そのため、減少していることは現代の小学生は親が何でもしてくれるという信頼をおき、自分自身の生活を親に預けるという甘えた傾向にあると考えられた。では、次に先行研究で携帯電話の論文があったため、現代のコミュニケーションツールの1つになった携帯電話の利用について述べる。

まず、表1－3から携帯所有率が把握でき、学年を重ねるごとに携帯電話を持っている子どもが増加していることが理解できた。その中でも小学生男子16.3%、女子21.6%・中学生男子39.1%、女子51.4%とどちらの学年も女子の方が携帯を所有している割合が高かった。そして、表1－4の携帯について思うことの統計では「携帯電話が無いと今の生活は不便になると思う」と「携帯電話を使うのが楽しい」では小学生・中学生の男女ともに高い割合であった。ここから携帯電話を所有している子どもは携帯電話を自分たちの生活の一部と考えており、携帯電話が便利かつ多様性の機能を活用し、自らの生活が携帯電話とともに回っていると考えられた。そして、「電話やメールがこないとさみしくなる」の項目では中学生の男子41.1%・女子60.0%であり、携帯電話という距離が離れていても気軽に連絡が取れる機器から携帯電話に依存している子どもが多いと考えられ、思春期である中学生は孤独を嫌っていることが考えられた。最後に「会ったことがない人と電話やメールでや

りとりすることがある」の項目では小学生より中学生の方の割合が男女ともに増加していった。先ほどの項目とこの項目で現代のこどもは携帯電話がコミュニケーションツールの1つであると浸透していると同時に相手と対話する機会で携帯電話が中心になることで、相手と直接会って対話する時間が少なくなっていくと考えられた。

以上の生活環境の比較から携帯電話を通じた友達との関わり方の変化を私は考察することが出来た。そのため今回は「友達との関わり方の変化」の1点に絞って考察していきたい。

表1-3　携帯所有率　　(%)

小学生		中学生	
男子（2172人）	女子（2062人）	男子（2278人）	女子（2254人）
16.3	21.6	39.1	51.4

(資料所出)「第1回子ども生活実態基本調査報告書 - Benesse教育研究開発センター(2004年11月)　第1章　毎日の生活の様子　第3節メディアとの接触　3.携帯電話の利用(1)」

表1−4　携帯電話について思うこと　(%)

	小学生		中学生	
	男子 (354人)	女子 (446人)	男子 (890人)	女子 (1158人)
携帯電話が無いと今の生活は不便になると思う	49.7	61.9	69.8	82.0
携帯電話を使うのが楽しい	54.8	76.4	76.4	90.3
何もすることがなくなるとすぐに携帯電話を見てしまう	28.8	44.4	50.2	67.9
電話やメールがこないとさみしくなる	19.0	33.4	41.1	60.0
会ったことがない人と電話やメールでやりとりすることがある	7.9	8.3	15.9	25.2

注）携帯電話を所有している人のみ回答　　「とてもそう」＋「まあそう」の%

(資料所出)「第1回子ども生活実態基本調査報告書 - Benesse教育研究開発センター(2004年11月)第1章　毎日の生活の様子　第3節メディアとの接触　3.携帯電話の利用(2)」

第2章　考察

友達との関わりに関して、1973年（表4-1）では「近所で遊んだ」33.3%「校庭で遊んだ」45.3%、2009年（表4-2）では「友人や仲間とあったり遊んだりする」63.2%であり、友達と遊ぶ面では1973年の子どもと比較して現代の小学生の割合が高い割合で友達と良く関わっていることが把握できた。しかし、私は現代には携帯電話という新しいコミュニケーションツールが出来たということが大きな変化を生んだと考える。

これは、携帯電話の使用方法から子どもたちのコミュニケーションに影響与えているという私の仮説と一致しており、表1−4での『携帯電話について思うこと』の表では「電話やメールがこないとさみしくなる」の項目で中学生の男子41.1%、女子60.0%、「会ったことがない人と電話やメールでやりとりすることがある」の項目では小学生より中学生の方の割合が男女ともに増加していった。ここから現代のこどもは先ほどの項目とこの項目で現代のこどもは携帯電話がコミュニケーションツールの1つであると浸透していると同時に相手と対話する機会で携帯電話が中心になることで相手と直接会って対話する時間が少なくなっていくと考えられる。そして、この考察をより掘り下げることで仮説では分からなかった新しい知見があった。

携帯電話は相手の表情を伺うことなく、会話がとれ、メールに至っては文字のみの会話である。そのため、相手のノンバーバルな言語を読み取ることができず会話を行うため、日常で直接話す場面で相手と接する距離が把握できない・または鈍感になってしまう大きな問題が起こってしまう。『コミュニケーションと人間関係』と『コミュニケーション学の招待』の2冊の文献からはコミュニケーションの中で非言語的コミュニケーションは会話の中で非常に重要な能力であると述べられている。そもそもノンバーバルコミュニケーション（NVC）とは、たとえば、我々が相互作用する時の人と人との距離、ジェスチャー、コンテキスト、をもたらして我々の会話を補う「目の動きと表情等の広範囲なしぐさ」というボディーランケージで表現する言語である。表情分析で有名なエクマンとフリーセンは、実際の表情を分析しながら、表情には「驚き」「恐怖」「嫌悪」「怒り」「幸福」「悲しみ」という6パターンがあると指摘し、この基本パターンは民族を超え普遍的であると述べている。そのため、距離の近接性、タッチ、視線、音声的関心等で相手との距離を推し量ることが出来るのである。その距離感を推し量ることが出来れば、自身と相手の距離を理解することが出来、信頼関係の構築は円滑に進められると私は考える。

そこで、次に下記の図１子どもの頃の体験と大人になってからの規範意識の関係を見てもらいたい。

・図１　子どもの頃の体験と大人になってからの規範意識の関係

(%)

		高 ← 規範意識 → 低		
友達との遊び	多	38.3	33.9	27.8
	↑	30.7	33.0	36.3
	少	18.1	31.4	50.4

（資料所出）独立行政法人国立青少年教育振興機構『「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書(平成22年10月)』

上記の図１は子どもの頃の体験と大人になってからの規範意識の関係性の割合を示している表である。図１を見てみれば、友達との遊びという項目を多く経験している者は規範意識が高く保っていることが把握できた。逆に経験が少ないと回答した者は経験が少なくなるにつれ徐々規範意識は低下していっていた。これは社会集団での行動に関係する友達との遊びでの規範意識に関係することである。その集団行動に関係する友達との遊びの項目では経験が少ない者は規範意識が低いという関係が 50.4%と過半数を超えるという割合であった。

つまり上記の図１を踏まえた結果、私はここでの規範意識とは相手との「距離感」であると捉える。距離感を理解することで相手に対してどのようなコミュニケーションが適しているかを把握することが出来る。例えば、積極的に話しかけてくる相手に対しては、無愛想な態度はとらないということである。これはとても簡単なことであるが、逆のことをすれば、相手は不信感を募らせ信頼関係を築きにくくなるであろう。そのため、ノンバーバルコミュニケーションは相手と信頼関係を形成する際のターニングポイントとなる。しかし、現代社会では携帯電話で友達・親と連絡するコミュニケーション方法が浸透している現状であるため、ノンバーバルコミュニケーションの機会が減少している。そのため、相手との距離感を把握することが出来ず、してはいけない事（暗黙の規則）を自ら感じとれない、また相手からその指摘をされないという問題が生じ、規範意識が養われないので

ある。そのため、子どもが友達・親との会話が携帯電話中心になれば、ノンバーバルコミュニケーションのスキルが向上せず、信頼関係形成時での相手と自分との間のルールの学習する時間を削っているということであると私は考えられた。

おわりに

以上のことから現代の子どもは携帯電話でのノンバーバルコミュニケーションの機会の減少からの規範(相手との距離)意識の低下が見受けられた。この環境の影響は子どもにとって深刻な現状であると私は捉えた。しかし、携帯電話は現代社会で効率よく行動するためには必要不可欠なものであり、多くの国民からは信頼を得ているのが現状である。そこでこの文化とうまく付き合っていく方法を確立していく必要があると私は考える。文化そのものを否定することは文化の利点も否定することになる。だが、本小論で私が論じたものはひとつの説であり、まだまだ他の生活環境の変化で何らかの影響を及ぼしているであろう。そのため、この研究内容はまだまだ発展途上にあると研究を通して感じた。そのため、今後も文化を深く理解し、うまく付き合っていく研究を推進していくことが重要になってくると私は考える。

参考文献

・足立　由美、高田　茂樹、雄山　真弓、松本　和雄『携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係』教育学科研究年報 29. 7－14、2003 年 3 月

・Benesse 教育研究開発センター『第 1 回子ども生活実態基本調査報告書(2004)』、1－19、2011 年 8 月 20 日

http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2005/hon4_1_01.html

・独立行政法人国立青少年教育振興機構『子どもの体験活動の実態に関する調査研究(2010)』、23 - 76、2011 年 8 月 20 日

http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/62/File/10taiken-05.pdf

・橋本　良明　『コミュニケーション学の招待』、大修館書店、1997 年

・石井　正人　『言葉、通じてない コミュニケーションの歴史としくみ』、新日本出版社、2006 年

・苅野　正美、吉野絹子『携帯電話コミュニケーションにおける新密度の影響』プール学院大学研究紀要、第 45 号、97－109、2005

・子ども調査研究所　『子ども調査研究所』、1973 年

・内閣府政策統括官(共生社会政策担当)『低年齢少年の生活と意識に関する調査(2007)』、34、2011 年 8 月 20 日、

http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/teinenrei2/pdf/gaiyou.pdf

・大江　宏子『公共空間における非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」』情報社会学会誌 vol.4 No.1 27-37、2009

・氏家　達男・斎藤　こずゑ・平木　典子・湯川　良三・高橋　恵子・稲垣　佳世子『児童心理学の進歩・2010 vol.49』、金子書房、2010 年

・スティーブン・ダック（和田実訳）　『コミュニケーションと人間関係』　ナカニシヤ出版　2000 年

・田口　恒夫・水野　悌一・津守　真・本田　和子・浅見　千鶴・黒田　淑子・松村　康平・棟方　志功ほか『人間生活科学講座　児童における人間の探求』、光生館、1974 年